る。無論積極的に之を證明し得るとは考へないが、他に更に資料が現はれて、かゝる想像を證據立てる時が無いともいはれまい。

⑯ 東洋學報第十三卷、拙稿「漢蕃對音千字文」、四一〇頁9)參看。(編者註、本卷四一九頁9))

⑰ Karlgren, Analytic Dictionary of Chinese.

⑱ Serindia, II, 828-829.

⑱a 初めの bad(a)raguldu は衍であらうと思ふ。光緒に對して badaraguldu と書き出した後、大清國と書き添へたが爲に、此の語をそのまゝに殘したものと考へられる。大清國の上にかゝる語を冠することは、自分は知らない。

⑲ Bibliotheca Buddhica, XVII, (1913) 序文。

⑳ 別に Ch. XXVII, 002 の番號を付せられた回鶻文佛典も、矢張り此の考の上から見て、必ずまた同時代に屬するものであること疑無いと信ずる。

㉑ 此の識語はロス氏所藏のロートグラフ本には存せず、自分が原本について書き留めて置いたものに據つたのであることを斷つて置く。

㉒ 此の識語も前同樣の次第で、自分の手記に據つた。yamu については適當の解釋を知らない。

尙此の識語の前に、luu yil 以下 bu nom ni に至る迄、全くこれと同文の一行が書かれ、その又前にも僅少の語から成つて然も完結しない一文を、三回までも繰り返して書いたものがあつたこと丈けは手記に存するが、その文句を逸して居るから、今こゝに之を載せ得ない。

㉓ käzig はラドロフ氏の字書に據ると ein gaschnittenes Stück, Theil と譯されて居る語である。本書に於ては卷一第十一枚裏に於て、六百行頌に對して altï yuz käzig kärig と記し、之を「行」の意に用ゐて居る。しかしチュケル・テミュルは、001 前綴第二枚の識語によつても、たゞ一行のみを書いたものとは思へないから、矢張り一部分の義に用ゐたものに